

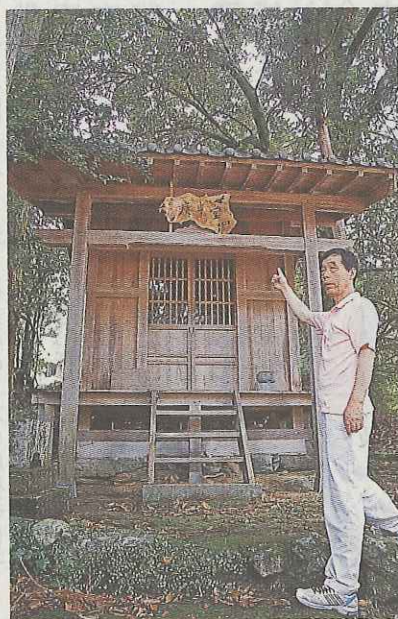
# 「大江健三郎」を生んだ村

古い家並みの内子町の中心街から44番札所大宝寺へ、小田川沿いに国道379号を歩いた。10キロほど行くと、大瀬という地区に入った。

ノーベル賞作家の大江健三郎さんは、1935年にここ



## 四国発 寄り道遍路



庚申堂を指す折本正範さん＝内子町大瀬中央

大瀬の成留屋集落で生まれた。川沿いの家並みは130戸ほどで、背後から森が包み込んでいる。小説「万延元年のフットボール」などで描い

た「森」が持つ生命力と神話は、ここに源がある。大瀬は、大江さんが生まれた育った当時は大瀬村で、生家近くに村役場があった。明治中期の木造のこの建物は、99年に改修されて、宿泊できる交流施設「大瀬の館」として

使われている。年間約250人が宿泊するという。館の2階に1泊した。素泊まりで4千円。1階には大江さんの作品約250冊を並べた展示室があった。夜、大江さんが少年時代について記した本を拾い読みした。

翌朝、この施設の活用を推進してきた折本正範さん(66)の案内で周辺を歩いた。大江さんは9歳の時、川沿いの柿の葉が揺れるのを見て自然の驚異に気づいたと、自伝で書いている。その柿の木を探してみたが、護岸工事でなくなってしまったようだ。対岸の急斜面を登ると、川筋にある成留屋の家並みが一望できた。少年だった大江さんが、ここからよく村を見おろしていたという。大江作品にときどき描かれる「谷間の村」を思わせる風景である。大江さんが通った大瀬中学校の近くに、庚申堂があった。大江さんのお母さんが毎日のようにお参りし、大江さんも帰郷すると訪れていたと、折本さんが教えてくれた。このお堂は94年に再建され、その年、大江さんはノーベル文学賞を受賞した。

大瀬を歩き、大江さんの創作の原点がおぼろげながら見えた気がした。(長谷川千尋)